

## V. 組織によるFD活動報告

### A. 人間言語学科

人間言語学科では、2009年度に始まった「人間科学基礎演習」において行った授業運営及びFD活動に関して報告したい。本授業は授業計画にも示されているように、2名の教員が合同で担当し、授業参観も行うという新しい授業形態で行った。

#### 本授業科目の概要及びねらい

人間言語学科の学びについて、その全体像をつかむとともに、言語・文化の諸領域について理解を深める。また、興味のある内容について調べ、深める作業の基礎について、演習形式で体験しながら学ぶ。

#### 授業の到達目標

- ①人間言語学科で扱う言語・文化の諸領域とその全体像を把握する。
- ②人間言語学科で学ぶことの意味について理解する。
- ③大学での勉学への取り組み方の基礎を学び、各自の将来の目標を明確にしていく。

#### 授業計画

- 第1回 オリエンテーション：本授業の内容、計画、受講の仕方について知る。(黒木・小西)
- 第2回 前期の振り返り：前期の授業について振り返る。(何を学んできたか、何を得たか。高校での学習と何が違っていったか。)(黒木・小西)
- 第3回 後期の受講に向けて：後期で何を学ぶか、第2回の振り返りをもとに考える。(黒木・小西)
- 第4回 コースガイダンス：2年次からのコースについての概要を知り、履修計画を立てる。(黒木・小西)
- 第5回 学び方について(1)：日本語系の授業の概要について知る。(黒木)
- 第6回 学び方について(2)：英語系の授業の概要について知る。(小西)
- 第7回 レポートの書き方(1)：レポート作成の進め方について学ぶ。(黒木)
- 第8回 文献の読み方：文献の集め方、効果的な読み方について学ぶ。(黒木)
- 第9回 図書館ガイダンス(1)：図書館の利用方法について学ぶ。(黒木・小西)
- 第10回 図書館ガイダンス(2)：文献検索実習(課題にしたがって文献を検索する。)(黒木・小西)
- 第11回 機器の利用の仕方：機器を利用した文書やプレゼンテーション用資料の作り方

を学ぶ。(黒木・小西)

第12回 レポートの書き方(2):実際にレポートを書いてみる。(黒木)

第13回 プレゼンテーション(1): レポートの内容に関連して、プレゼンテーション用資料を作成する。(黒木・小西)

第14回 プレゼンテーション(2): レポートの内容に関連して、プレゼンテーション用資料を作成する。(黒木・小西)

第15回 まとめ:本授業を受講した感想や人間言語学科の学びに関する新たな気づきについてレポートを作成する。(黒木・小西)

### 各回の授業の流れと成績評価方法

○各回の授業の流れ

(1) 出欠や学生の近況の確認 (2) 本時の授業目標を伝える (3) 授業 (4) まとめと次回の内容を伝える

○成績評価方法

成績は「出席(30%)、授業ごとの提出物(50%)、最終のレポート(20%)」で評価し、学則第22条に示されるように授業実施時間数の65%以上出席しなければ失格とした。

### 授業の状況

担当者が合同及び各人で授業を担当した。授業中、学生たちが理解できないことは随時教員が対応に当たった。毎回それぞれの授業を参観しての感想、学生たちの反応、次回授業の内容の検討や教材の作成を共有しながら行った。



授業風景1



授業風景2



授業参観風景

授業参観及び授業後の検討会を通して、授業を一人で担当している時には、学生の詳細な反応、授業のスピード、学生たちの個々の理解度などで気づけないことを参観者に伝えることや次回の運営方法や教材作成において新たな視点をもたらえることなど、多くの利点を実感した。



授業前後の検討会

### 学生の声

授業評価アンケートの結果は概ね良かった。アンケートに寄せられた回答には、「レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方など大学で学ぶための基礎学習法を習得できた」「大学で何を学ぶのか、将来の目標を考える指針になった」「言語学科で学ぶことの意味を理解できた」といった、授業の到達目標を実感した声が多く見られた。また、二人の教員が担当するという授業形態については、特に、授業の進行、受講者からの質問への対応に関して評価する回答が目立った。一方、授業の開講時期については、「後期になってからではなく入学直後など早い時期に実施してほしい」といった、再考を求める回答が見られた。

### 担当教員の振り返り

今回のように、大学、特に学科における勉学の概要の理解を目的とした授業を新しく組み立てていくことは、筆者にとっては初めてのことであった。授業準備の段階で苦慮することもあったが、共同担当者との事前打ち合わせを通して、授業運営のアイデアを多く与えられ、大変有益な機会となった。特に、今回、共同担当者としてお互いの授業を参観する形をとったことは、授業を、常に自分が担当する場合に置き換えて参観することにつながり、自らの授業運営を見直すための貴重な手がかりを得ることができたと考える。

(黒木晶子)

今回授業参観と授業ごとの検討を体験して得ることが多かった。特に、自分が登壇しての授業の際に別の担当者が声の大きさや話すスピードのチェックや机間巡視して作業の進み具合を随時指摘してくれることが毎回の授業運営の改善に役立つことになりよかった。授業後の検討でも、授業計画の変更や教材の差し替えなど、より参加する学生の側に立って意見交換することができ、次回の授業につながることができたと思う。それらが学生たちの理解し易かった、あまり緊張しなかったという声に反映されているのだと思う。

(小西弘信)

### 学科長コメント

本年度からスタートした人間科学基礎演習の授業のFD活動の報告である。この報告から、教員相互の授業参観と授業後の振り返りを通して、担当教員の協同によって授業運営が学生たちの状況をよく把握でき、個々の学生にも応える授業になっていたことが分かる。一人の教員で行う授業でも、このような形で他の教員と協同で行うことで、授業運営がより学習者の状況とニーズに合わせたものにできる可能性を感じ、一つのケーススタディになったと思う。

(人間言語学科長 小西弘信)

## B. 初等教育学科

本年度は、FDに関する個人的な取り組みではなく、学科構成員全員で検討してまとめたことを報告することにした。

初等教育学科では、平成22年3月1日（月）の集中学科会1日目において、FD推進のための報告と協議を行った。学科会の場を活用した共同研究といった性格のものである。本年度は、教員がグループを作り、共同で授業を見合い、指導法改善につながる要素を見つけ出そうとした試みを報告した。そして、それに対する質疑応答をする中で、この面での研究を深めていこうとした。

報告したのは、過去3年間の、本学科のAO入試のレクチャー&ゼミ方式における実践記録である。それぞれの年度において、授業者と協力メンバーによって、学習者（対象は高校3年生であるが）に対してベストだと思われる授業内容・授業方法が計画され、実施される。それを取り上げて検討することが、翻って私たちの日々の授業づくりにも資するのではないかと考えたからである。

学科におけるAO入試のレクチャー&ゼミ方式で、私たち教員が申し合わせていることがある。それは、次の三点である。

1. 授業者の指導技術のベストなものを出して、授業協力者も意見を述べ合い、FD研究的に取り組んでいこう。
2. 多くの目で捉えられることの利点から、客観的に学習者の力を見よう。
3. そこで捉えたことを、入学後の指導に生かしていこう。

これらの中で、まさに1の項目があることによって、本年度のFD活動報告が方向づけられたと言ってよい。私たちは、このレクチャー&ゼミ方式の中で、学習者の、次のような力を捉えようとしている。一点目は、授業に参加し、講義内容をしっかりと理解する力である。二点目は、それを基に、レポートを作成する力である。さらに三点目は、演習の中で、作業したり、討論したりする力である。

以下、学科におけるAO入試のレクチャー&ゼミ方式で、初年度の担当をした岡の取り組みを、基調提案的な性格があったことから最も詳しく述べ、二年目に担当した杉山、三年目に担当した有馬がどのように発展させていったかを記すことにする。さらには、質疑・応答の概要を載せ、今後の課題を探っていくこととしたい。

### 1. 岡の授業について

まず、平成19年7月に実施した授業の概要を示す。

授業日	平成19年7月28日（土）
担当	岡 利道（国語科教育法担当）
タイトル	『絵本 おこりじぞう』を読む
ねらい	物語絵本に描かれた出来事および表現を見つめ、それらがどのような価値や重要性を持っているか、個人で、また小集団で検討する。
概要	児童が、ある「教材」で国語の学習をする。幼児の場合は、ある「作品」の読み聞かせにより、その世界にひたるということになる。何らかの〈意義〉があるからこそ、「教材」あるいは「作品」と呼べるので

あろう。この場合の「教材」あるいは「作品」としての〈意義〉とは何であろうか？ 『絵本 おこりじぞう』を取り上げ、この問題を追究していくことにする。

次に、授業の流れ（プロット）を示す。

1. 自己紹介

和やかな雰囲気になるようにする。

2. 講義の流れの説明

板書（講義タイトル 講義者名 ねらい 参考文献） 講義者自己紹介・補助者の紹介 → 開始前

『絵本 おこりじぞう』の朗読 → 15分 感想をノートに書く → 5分

グループに分かれての話し合い（発言したことのノート記録を含む） → 15分 講義とまとめ → 15分

レポート課題の説明（レポート用紙配付） → 講義終了直後

3. 講義とまとめについて

導入 話し合いの評価

展開 四国五郎さんの話の紹介（プリント）

『教科書版 おこりじぞう』について触れる（プリント）

『ストーリーテリング版 おこりじぞう』について触れる（実物）

まとめ 小学生なら教科書版。『絵本 おこりじぞう』は、高学年以上か。幼稚園児にはストーリーテリング（簡略化）。

『ずうっとずうっと大好きだよ』について触れる（プリント）

終末 本時間の評価

4. レポート課題渡し

なお、下線部のところが最も工夫をした部分であり、興味を引く資料（実物やプリント）を提示し、学習者の感性に訴えかけるとともに、考えに揺さぶりをかけ、ノート記述や発言の促進をめざした。補助の先生方と途中で細かい打ち合わせを追加できないことから、以下のような「話し合い時のマニュアル」を配っておき、共通理解を図っていた。

1. 開始の礼 「よろしくお願いします。」

2. 全員発表・自由発言（討論）

「最初に、一人ずつ、全員に発表してもらいます。まず、名前を言ってください。その次に、『絵本 おこりじぞう』を聞いた感想を言ってください。」（全員発表） → 7分

「ありがとうございました。続いて、私から質問をしますので、それに答えてもらいます。質問内容をゆっくり読み上げるので、ノートに書き写してください。では、質問内容を読み上げます。“幼児にも、先程と同じ方法で読み聞かせをしようと思います。これについて、あなたは賛成ですか、反対ですか。理由も付け加えてください。”繰り返しますので、確認してください。“幼児にも、先程と同じ方法で読み聞かせをしようと思います。これについて、あなたは賛成ですか、反対ですか。理由も付け加えてください。”

「時間を3分とりますので、自分の考えの要点をノートに書いてください。」 → 3分

「では、ここからは、自由発言の時間とします。発言したい人は、挙手してください。私から当てられた人は、発言してください。では、どうぞ。」（自由発言（討論）） → 5分

「まだ発言したい人もいるかも知れませんが、時間が来ましたので、これで話し合いを終わります。」

3. 終了の礼 「ご苦労様でした。礼。それでは、元の位置にもどってください。」

もちろん授業者が途中で付け足すこともあるということ、補助者からもよりスムーズに進行するよう臨機応変な対応は入れてもらっていいことを、事前に確認し合っていた。

そして、事後に学習者に取り組んでもらったAOレポート課題は、次の二つである。

[AOレポート課題1]

『絵本 おこりじぞう』のように、登場人物が死んでいく姿が描かれている作品を子ども（「子ども」は「児童」と捉えても「幼児」と捉えてもよい）たちに読ませるとき、教師として配慮すべき点について論じなさい。（300字～400字以内）

[AOレポート課題2]

教科書教材の「おこりじぞう」と「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の二作品それぞれの価値（「価値」は「よさ」と捉えてもよい）を論じなさい。そのとき、二つの作品の相違点や共通点にも触れるようにすること。（600字～800字以内）

作品のテーマが似通ってはいるが、登場人物は全く性質の異なる二つのもの（『絵本 おこりじぞう』と『ずうっと、ずっと、大すきだよ』）を比較させるようにしたのも、工夫した点である。手さぐりの新方式の出発であり、学習者に対して短期間（短時間）に多大な内容の作業を強いたきらいがある。私たちが捉える内容も多岐に渡り大変だった。が、得るものは大きかったと考えている。

## 2. 杉山の授業、有馬の授業について

杉山の授業（教育学関連）については、紙幅の関係で、当日の授業の流れのみを示す。岡の前年度の成果と課題をもとに、パワーアップが図られた。

- \* 導 入 「昔話」とは
- \* 展開 1 「三匹のこぶた」
- \* 展開 2 「ストーリーの比較」
- \* 結 末 「3という数字の意味」

有馬の授業（教育心理学関連）については、若干のコメントを紹介し、三人の授業実践の総括としたい。

FDとは、組織的活動を指す。現に、組織的（9人の先生に参観・協力してもらっている）な授業運営によって、「講義の感想をすぐに知ることができる。」「講義についてすぐにディスカッションすることができる。」というメリットが生まれた。

岡、杉山の過去の授業は、非常に丁寧な授業、本物を使った授業、しっかり準備された授業だったと見ている。しかし、時間内で学習者の理解が深まっているものの、学習者の自由な考えが出にくかった、という点では改善を要すると考えた。

そこで、有馬としては、次のようなコンセプトで、授業づくりをすることにした。二

点あり、「答えがすぐに出ない授業」と、「学習者の心をくすぐるような授業」である。  
当日の授業の流れは、以下のとおりである。

\*導入：こころとは

機械のこころ

\*展開：心への気づき

心の理論

\*まとめ：アトムの「心」

講義後の討論の観点は、これまでの反省から、明確になるように配慮した。具体的には、次の項目である。

○人間観（人間とは？ 人間の心とは？）

○「悪」に対する問いかけ（悪い心って？）

○深い人間理解に向けて（深い理解には何が必要か？）

○感情への転移（苦しみや悲しみの心は、よい心か？）

最終的なレポート課題は、「他者の心が分かるとはどういうことか？」という、かなり焦点化したものにした。

### 3. 質疑・応答より、そして、まとめへ

教員にとっては研究授業として位置付き、学習者にとっては大学の授業での学びの様子が分かる上で有意義だった、という意見がでたものの、あとの大半は、批評的に、厳しく議論していくこととなった。

例えば、「授業内容そのものと、学習者の実態にズレがあり、即ち学習者の学力の二極化が進んでおり、それへの対応が不十分である。」といった意見である。多様な学習者に適切に対応することが、指導の基礎技術としてないがしろにできないものとなってきた。

もう一つ挙げるならば、「私たちの、現実に行っているゼミにおけるFDをどう総括して、このような場での実践につなげたのかがわかりにくい。」といった意見である。講義、演習、実習の形態それぞれにおいても、FDが進んでいるようで進んでいない。本学科としても、さらにこのような研究を継続して、英知を結集したいものである。

その他、次のような意見も出された。

- a. ベストな教え方はなく、学習者の一つの満足度を上げて、別の一つの満足度は下がることもあり、授業は、そういった変数をもっているものとして捉えるべきだ。
- b. 基礎的領域と応用的領域の授業では、方法論が異なり、従って評価も多様であるべきだ。
- c. 本学でも、学習環境、ソフト面など色々問題があることが指摘されているが、そのような基盤の整備を組織的にしっかりと推進していく必要がある。

これら三つの意見は、今後の改善のあり方を示唆してくれているのではあるまいか。私たちの専門や個性を生かしつつ、授業に即した評価観というものをしっかりと持って、よりよい指導方法の追究をめざそう、全員で研鑽していこう、ということが浮かび上がってくるような気がしてならない。

(文責 学科長 岡 利道)



## C. 人間福祉学科

### 1. 「人間科学基礎演習」内容の検討

本学において「文教スタンダード 21」が本格的に導入されることになった。これまで、初年次教育として学科では「人間福祉学」という教科を展開していた。これは、学科教員が最低1回は時間を担当するオムニバス形式の授業であった。学科教員の「顔見せ」としての意味合いと、社会福祉に多面的にアプローチしていく姿勢の基礎を形作る授業として、特に初年次の前期に展開する授業であり、かつ必修科目であったということもあり、受講学生には概ね好評であった。しかし「文教スタンダード 21」の導入と社会福祉士および介護福祉士の国家試験受験資格取得のためのカリキュラム改訂が同時に重なることにより、初年次の前期のカリキュラムに「人間福祉学」を展開するどころか、科目の存続も不可能となってしまった。また、これまで1年次通年で展開されていた「社会福祉演習」についても、科目の存続が不可能となった。

幸い、「文教スタンダード 21」においては、学科の特性を最大限活かすことが許されている「人間科学基礎演習」が用意されていた。そこで学科としては、この「人間科学基礎演習」をどのような内容のもとで展開するのかについて検討することになった。当初は昨年度までの「人間福祉学」と同様、学科教員のオムニバスで…との意見もあったが、

- ①前期で1年生を担当している学科教員および教養教育部教員、非常勤講師より、学生について多数の意見（文章力、授業態度…など）が寄せられたこと
  - ②「社会福祉演習」の科目が無くなってしまったことにより、学生がグループ活動や話し合いなどを行い、互いを知る機会が減少してしまったこと
- などの現状をうけ、授業内容にある程度の改変を加える必要があるということで、教員の認識が一致した。

以上の経緯のもと、人間福祉学科は今年度の「人間科学基礎演習」について、次のような方式で授業を行うことに決定した。

- ①昨年までの「人間福祉学」の授業が果たしていた役割を重視し、全教員が自らの研究分野やバックグラウンドに関する内容を取り入れながら、最低1回の授業を行うこと。
- ②「社会福祉演習」の授業が無くなったことを受け、授業になるべく演習形式やグループ活動・グループ討論方式を取り入れ、学生間の「つながり」づくりに努めること。
- ③毎回のレポート題材を工夫すること。「授業内容のまとめ」「感想」にとどまらない、「感じたこと」「考えたこと」をじっくりと書いてもらうように促すとともに、その分量を増やしたこと。
- ④各教員が指定した科目とは別に、学生には、本科目についても「授業アンケート」に回答してもらい、その結果を検討し、次年度の授業計画につなげていくこと。

授業の内容は次表の通りである。

回	内 容
1	オリエンテーションとグループワーク
2	ポートフォリオ作成とグループワーク
3	グループワーク
4	グループワーク
5	発達の共感関係～悩み続けることのできるチカラ
6	子どもへの支援①
7	子どもへの支援②
8	福祉工学入門
9	高齢者福祉の現状と課題
10	医療と福祉の協働について～ホスピスケアを中心に～
11	まちのふくしを支える
12	子どもの食育について
13	自分についてもう一度考えてみよう
14	福祉援助職に求められる力とは
15	まとめとふりかえり

授業実施後、ユニバーサルサポートおよびアンケート用紙を用いて授業評価を行った。内容面や授業の進め方については「各教員の専門を活かした内容であり、それぞれについて興味を持てた」あるいは、「自分の進む方向が定まった」などのコメントが見られた。さらには、「これまで関わったことのない人たちとも積極的に関わる機会が得られた」との記述も見られ、当初の目的がある程度達成されたのではないかと考えられる。また、学科内外の教員より、授業態度や提出されるレポートの内容について、前期に比べて向上した旨の意見も寄せられた。これについては単に学生が大学での学びに慣れてきたことや、この授業以外での授業担当者やチューターによる指導の効果であることなどが理由として挙げられるが、本授業の影響も少なからずあったのではないかと考えられる。

一方で、各回の内容にばらつきが生じてしまわざるを得ないために、学生に混乱を生じさせてしまった点などが課題としてあげられる。実際に「○回目と○回目は良かったが、○回目はよくわからなかった」という形で学生が感想を寄せるケースもあった。

今年度は模索しながらの授業展開であったが、来年度は以下の点に留意しながら、本授業の内容および手法面における質の向上にむけ、学科全体で取り組んでいきたい。

- ①学生の記事リテラシー能力の向上により重点をおいた授業を展開すること
- ②授業内容について、学科内教員における情報共有・意思統一を強化すること
- ③福祉分野における初年次教育のあり方を検討する機会として最大限に活用すること

(報告者 溝渕 淳)

## 2. 人間福祉学科の学びの基礎としての「人間科学基礎演習」における取り組み

昨年度までの人間福祉学科における組織的なFD活動は、各教員の教授内容がどのように関連・発展しているのかということ、検討し、「学びのマップ」という形で可視化することを行ってきた。福祉を学ぶということは、あらゆる領域で学んだことが学生一人ひとりの中で統合されることが必要であると考えたためである。このことは、科目間の関連を意識した授業展開という点である程度の成果が見られた。本年度は、初年次教育科目である「人間科学基礎演習」を全教員で取り組むことによって、「福祉」の学びの基礎を培うとともに、実践的な力の育成に重点を置いた取り組みを行った。特に各教員が意識的に取り組んだ活動は、単に、専門領域についての内容理解だけにとどまらず、専門領域の内容について自分自身で「考えること」、「考えたこと」をグループで「共有すること」、「共有したこと」をグループワークで「深めること」という手順を踏んでいくことであった。本年度は、演習における展開過程を意識的に設定するといった試みを行ったところであり、1の内容の検討でも述べられている通り、授業内容についての情報共有・統一が十分に図られてはいなかった。「考える」「考えを共有する」「考えを深める」の次に、「考えを繋ぐ」という、領域間の関連へと意識できるように取り組んでいくことによって、学びの統合ができていくものと思われる。

また、この「考える」「考えを共有する」「考えを深める」「考えを繋ぐ」ということは、ソーシャルワーカーとしての技能の基礎となるものである。今後「人間科学基礎演習」だけでなく、他の科目の授業においても、取り入れていく必要のある展開過程であると思われる。

(学科長 木村 敦子)

## D. 心理学科

### 1. 「人間科学基礎演習」におけるFD活動

本年度より開講された人間科学基礎演習は一年次後期の教養科目に位置付けられているが、学科の導入教育として重要な科目である。とくに心理学は大学で初めて学ぶものであることから、この科目を重視し、その都度学科長と1年チューター2名で協議を重ねながら、運営を行った。

### 2. 授業について

授業形態：演習

対象学年：心理学科1年生

担当：田村 進、木本明日香、植田 智

開講時期：後期（水）

### 3. シラバス

#### a. 授業の目標・概要

この授業では、これからの心理学のより深い学びに向けた準備と動機づけ、さらに将来の見通しを立てることをねらいとした。

まずはクラスのとまとまりを高めると同時にグループでのイベント企画能力を高めるために、簡単な企画への取り組みを行う。

その後、大学の4年から将来にわたるキャリアガイダンスを行い、後半で学科にある教育機器の利用の仕方や今後重要となるレポートの書き方など、自ら学問を深めるための予備知識を習得する。

#### b. 授業の計画

第1回（10月7日）

オリエンテーション：本授業の進め方、e-Diaryについての説明

第2回（10月14日）

集団活動1：活動内容の決定とグループ分け・役割分担

第3回（10月21日）

集団活動2：グループ間での連絡・調整

第4回（10月28日）

集団活動3：実際の活動

第5回（11月4日）

キャリアガイダンス1：2年次以降の心理学科の学びについての概説

第6回（11月11日）

キャリアガイダンス2：心理学科卒業後の進路についての概説

第7回（11月18日）

コースガイダンス：2年次からのコースについて概説

第8回（11月25日）

図書館ガイダンス 1 : 2 グループに分かれて利用方法についてのガイダンス  
第 9 回 (12 月 2 日)

図書館ガイダンス 2 : 2 グループに分かれて利用方法についてのガイダンス  
第 10 回 (12 月 9 日)

図書館ガイダンス 3 : 文献検索実習 (個別の課題を検索する)  
第 11 回 (12 月 16 日)

心理学の教育機器の利用の仕方 1 : 学科にあるパソコンや印刷機などの利用方法の  
説明

第 12 回 (1 月 13 日)

心理学の教育機器の利用の仕方 2 : 学科にあるパソコンや印刷機などを利用

第 13 回 (1 月 20 日)

レポートの書き方 1 : 2 年次以降の授業で大きなウェイトを占めるレポートの書き方  
についての概説

第 14 回 (1 月 27 日)

レポートの書き方 2 : 2 年次以降の授業で大きなウェイトを占めるレポートの書き方  
についての概説

第 15 回 (2 月 10 日)

まとめ: 本授業を通しての感想や心理学についての新たな気づきなどについてのレポ  
ート作成、コース分け結果についての説明

#### 4. 担当者の感想

多くの学生の取り組みは、概ね良好だったように思う。特に、e-Diary という毎週担当教員にメールを送信させる課題については、コミュニケーションを図ることとパソコンの利用というねらいを一定水準到達できたと評価できよう。また、心理学の学習内容に不足していると考えたことから取り入れた集団活動については、予想以上に学生が相互に協力し、十分な成果を得たと考える。

一方で、キャリアガイダンス、コースガイダンスのようなキャリアに関わる内容、図書館ガイダンス、学科内の教育機器の利用方法、レポートの書き方のようなスタディ・スキルに関わる内容については、今ひとつ学生の興味・関心を引くことができなかつたように思える。担当者の技量の低さを否定するわけではないが、これらの内容は前期に伝達することで大きな意味をなすものであり、後期の、しかも後半部分にこれらの内容を配置したことが不適切であったとも考えられる。今後の課題として、開講期を変更することは困難であると思われることから、同様の内容を扱うにしても、一般論としてではなく、学生一人ひとりの課題・問題に即したかたちで提示することで、より高い成果をあげていくよう工夫することが必要であろう。

#### 5. 学科長所感

先にも述べたとおり、この授業は大学に入って初めて心理学を学ぶ学生たちにとってとても重要な科目と認識している。とくに、臨床心理士以外に有力な資格を持たないため、ややもすると明確な目標や将来像を描けないままに 4 年間を無為に過ごしてしまう可能性がある。4 年間の

学問の見通し、心理学を学んだ学生たちの将来像、心理学を学ぶために必要な基礎的学習スキルや大学生活への適応のための基本的な社会的スキルの習得など、3名の教員で入念な授業計画を立て、学生の状況に応じて臨機応変に修正を加えながら授業を組み立てた。また、こうしたガイダンス授業は平板で退屈なものとなりやすいため、簡単なイベントやウォークラリー、クイズ形式の確認テストなどを散りばめ、学生たちが積極的に取り組めるような工夫も図った。

こうした取り組みの結果、最後の感想レポートからは、学生たちのおおむね良好な評価が得られていた。今回組み立てた心理学科の導入教育の枠組みは、今後の心理学科全体としての導入教育の基盤になるものと考えている。

(報告者：植田 智)

## E. 人間栄養学科

### 1. 学科の組織的なFD活動

1年生から4年生までの期末試験は、管理栄養士国家試験出題形式(5択問題)で出題するよう教員に徹底した。その結果、次のような教員のFD活動が展開された。

- a. 現在の学習内容が国家試験ではどのように出題されているのかを意識させるために、単元ごとに割り当て、5択形式の問題を1問ずつ作成あるいは過去問題集から引用して提出させ適宜修正後、問題集として配布した。(学期末試験の一部もこの問題集から出題した。)
- b. 毎回の講義で実施している小テストにおいても記述式に加えて、国家試験出題形式を出題し、理解を深めさせるようつとめた。

### 2. 専門基礎分野担当教員の個人的なFD活動

- a. イメージが掴みにくいことに配慮して、図を多用すると同時にアニメーションで注目点が分かりやすいようにした。またハンドアウトとしてサブノート式のプリントを作成し、スライドと連携しながらポイントを記入してゆくようにした。
- b. 生命に関する問題を他人ごとではなく、自分の問題としてとらえる機会を設けようと思い、「生・老・病・死を考える 15章——実践・臨床人間学入門 庄司進一編 著 朝日新聞出版」から講義内容に関連した2テーマ「脳死になったわが子の臓器提供」「命の期限を告知されたら」を紹介し、「あなたなら、どうしますか」という課題でレポートを提出させた。

### 3. 専門分野担当教員の個人的なFD活動

- a. 新聞から医療に関する記事をひとつ選び切り抜き、それに関連することを自主学習してまとめ、意見をレポートとして提出させた。また内分泌に関するキーワードを使った俳句をひとつずつ作って提出させた。「リズムで覚える内分泌」として、全員の作品をまとめて配布した。
- b. グループワークから取り残される学生の救援策として、個人演習を取り入れたが、予想どおり個人差がかなり発生した。症例別の栄養管理計画書を作成する演習であるため、理解が早い学生は、次々に作成していき、理解が遅い学生との差が歴然となった。今後の工夫として、理解の早い学生と、理解の遅い学生を安易にグループでくくって、常に片方のリーダーシップで演習を進めるのではなく、理解の遅い学生もあきらめることなく、自力で演習をすすめていけるさらなる授業の工夫が必要

である。

#### 4. 学科長所感

平成 21 年度は、学科全体として組織的な F D 活動に取り組むように教員に指示した。具体的には、1 年次から管理栄養士国家試験を意識させるために中間試験や期末試験問題を国家試験の出題形式にするよう徹底した。その結果、文章問題の記述式に比べて教員も採点があいまいにならず、また学生も正確に理解していないと正解を導くことができないということが明らかとなった。平成 22 年度もこの活動を継続する予定である。

また教員個々も独創的な F D 活動に取り組んでおり、本稿ではその代表的なものを上述の 2 と 3 に挙げた。こうした平成 22 年度の個人的な取り組みの中でさらなる改善の必要性を把握し工夫がなされることを期待する。

(報告者：黒川知則)